

---

# スコール

きみよし藪太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スコール

### 【Zコード】

Z5563M

### 【作者名】

きみよし敷太

### 【あらすじ】

彼女の気紛れは桁外れ。

子猫なんてもんじゃない、予測不可能に突然やつてくるスコールと同じ。

こんなに振り回されて、どうして僕は彼女を好きでいるんだろう。今日だつてほら、こんなに些細なことで僕は怒鳴られているの。

彼女の『機嫌はスコール並だ。

今まで晴れていたはずなのに見上げた太陽はすでに雲の中、気がつけばパンツまでびしょ濡れの大雨に晒されて、それでいてため息を吐いているうちに今度は水分なんてどこにあつたのかと思えるくらいの晴天がまた広がる。

彼女もそうだ、あれは猫だとそんな気紛れな動物よりももつと予測不可能な、スコールに良く似ている。

アプリコットのワインは適切な温度で冷えていて、用意されたのは彼女の贔屓しているスイートカフェで買ってきたチョコレートパイと季節のフルーツタルト、バナナのココアケーキに林檎のチーズケーキ。付き合い始めて二年目、最近どちらかの家でばかり会っていたので、たまにはプチホテルにでも泊まりましょうか、といふことになつて僕はあまり気がすすまなかつたのだけれど　彼女の仲が冷えていた訳ではなくて、僕の面倒臭がり屋な性格のせいだ　彼女が嬉しそうにしているので、こちらだつてそれなりに楽しくなつてきた矢先に向こうは機嫌を損ねた。原因は簡単、僕がチョコレートパイを選ばなかつたせい、ただそれだけだつた。確かに僕は普段チョコレートが大好きだし、ケーキだろうがパフェだろうがチョコレート味を好む。それでも、たまには別のが欲しくなることだつてあるのだ、今日の僕がフルーツタルトを食べたい、と言つたように。

「フルーツタルトがいいの？」

ほらほらケーキ買ったよ、とこりした彼女が僕の目の前でケーキ箱を開き、そこにはつやつやのケーキ達が幸せに甘い香りを発しながら鎮座していて、僕の目尻だつて下がつた。どれがいいの、と聞きながら、彼女は僕が迷わずチョコレートパイを選ぶことを確信していたのだろう。でも僕は少し迷つてからフルーツタルト、

と口にした。それが食べたい、と。

「あなたが好きだから、チヨコレートの買つてきたのに？」

彼女の怒りは理不尽で不当だ、もしもどうしても僕に食べさせて買つてきたなら、どれがいいの、なんて聞かずにつつさとチヨコレートパイを田の前に差し出して、あなたの好きな買つてきたよ、とでも言つてくれれば、僕だってそれを食べたのに。

「お前が食べたくて買つてきたんだつたら、フルーツタルトじゃないのでもいいよ、チヨコレートパイでも構わないし」

「『チヨコレートパイでも構わない』？ なにそれ、渋々食べるんじゃないわよ、あたしだつて別にフルーツタルトが食べたい訳じゃないもの」

「だから、渋々食べる訳では、」

「食べればいいでしょ、フルーツタルト！ いい、あたしあ風呂入つてくる！」

ちよつと待てよ、の声も届いたはずなのに無視されて、彼女は部屋に備え付けのユニットバスへと駆込んでしまった。これで当分トイレの使用が出来ないということだ。彼女は別段長風呂といふ訳ではないけれど、機嫌を損ねているので立てこもりの意味も含まれる今回の入浴は、どれくらいの時間がかかるか分からぬ。貸し切りに出来る岩風呂があるからここのプチホテルを選んだくせに、ユニットバスに入つてしまつてどうするのだろう。

仕方なく僕はケーキの箱を閉じ直して、ワインを部屋の冷蔵庫に押し込む。食べればいいでしょ、と怒鳴られて、そうですか、とフルーツタルトをひとりで食べることなんて出来ないし、食べるつもりもない。彼女の機嫌が直つたら、やっぱりチヨコレートパイが食べたくなつた、と言つてやつて、彼女にフルーツタルトを勧めてやらぬといけないだろうし、と考えると自然にため息がこぼれた。自分で食べたくてフルーツタルトを彼女は買つてきたのだろう。彼女が否定しようが認めなかろうが、あの態度からすればそれには間違ひがなかつた。素直に自分からフルーツタルトはあたしのだから

ね、と一言告げてくれれば良かつたのに。

スプリングのよく利いたベッドに腰を下ろして、なんで僕は彼女と付き合っているのだろう、と考え込んでしまう。気は強いし我儘は言つし気紛れだし、男だろうが気にせず怒鳴るし女だから、といふ言葉を心底嫌つてゐるし。僕はもうちょっと女らしい人が本来好きだったはずなのに。休みの日は図書館までお散歩を兼ねて行くんです、とか、お菓子作りが趣味なんですけどシュークリームだけ上手く焼けないんです、とか、なんか、そんな人が。フリルのスカートとか、清楚なワンピースとか、長い髪は小さい頃から伸ばしていて、一度も染めたことなんかないんです、みたいな人が。僕は男兄弟の長男で、母以外の女性が家にいたことがなく、その母もどちらかといえば男勝りな人だったので、人からそんなメルヘンな女気持ち悪いよ、とどんなに笑われても、そういうのが理想だつたはずなのに。

「……なんでよりによつてあいつなんだ」

認めてしまえば、恋人と一年も続いたのは彼女が初めてであり、それまで僕が理想としていたメルヘンな人とは三ヶ月も付き合いが続けば長い方だつた。それは僕がそういう人達をどうやって扱つて良いのか分からなかつたという、その一点に尽きると思う。彼女達は「男」という僕に最後まで慣れてくれず、おどおどと遠くから眺めているだけだつた。メルヘンな人に憧れる割には、スポーツが好きだつたり友達と飲みに行くのが好きだつたり、プロレス観戦なんかどんなに眠い夜中のテレビにだつて噛り付いて見てしまう程で、彼女達は僕の好きな物をほとんど野蛮だと乱暴だとか言つて眉を寄せた。今の彼女もプロレスなんて人殴つてたり頭割つて血を流したり、真剣なのが八百長なのが分からないと文句を言いつつ、デートしている夜だともそもそと起きてきて僕の隣でぼんやりテレビを一緒に見てくれたりする。あれ本物の血？ とか、なんであの入り口の上で犬みたいにぐるぐる回つてんの？ なんて、見ているんだか邪魔してるんだか分からなくなるほど質問攻めにしてみたり、

気がつくと僕の肩に頭を預けて寝てしまつていたりするけれど。

ユニットバスからはとりあえず水音がしていた。シャワーを使っているのだろう、彼女の背中のラインを思い出して僕は目を細める。人の身体をやたらと洗いたがるくせに、彼女は自分の身体を僕に洗わせない。裸で僕に向き合つのが嫌なのだそうだ、女は子宮がある分どうしても下つ腹が出るのよそういうのを見られるのが嫌なのよ、と言つて。彼女の言つ下つ腹が出る、という状態は別に悪くないんだけどな、と僕は思うから素直にそう言う。お前のお腹に手を当てるだよ、と。彼女は猫みたいなアーモンド型の目をきゅうっと細めて形のいい唇をきゅうっと持ち上げて、それとこれとは違つのよつ、と語尾を跳ね上げて笑う。

その顔が、僕は大好きだ。

「悪かつたよ、いい加減機嫌直して出ておいでよ、」

ベッドのスプリングを利用してポンと飛び起き、僕はユニットバスのドアをノックする。

「コンコンコン、コンコンコンコンコン。

「出でいで、ケーキ食べよう。ワインも飲もう、冷えてるからさ」  
彼女と付き合い出してから、どうも僕の方がなだめ役というかフオロー役といふか、そんな位置についてしまつた。どちらかといえば僕も人間的に短気な部類に入るし、我慢強くないし根性もない方なのだけれど、彼女はもつと短期で我慢強くなくて根性もなくて気分屋で表情だつてごろんごろん変わってしまうスコールちゃんなので、もう、どうしたつて付き合つてゐる人間はふたり、片方が先に機嫌を損ねてしまえばもう片方がどうにかするしかない。物分かりが良くなつた訳でもなく、年を取つて丸くなつた訳でもなく、彼女の存在が僕を優しくさせる。

「出でこーい、おーい、フルーツタルト本当に食つちまうぞー」

そんな彼女だからケンカだってケンカにならない。今日みたいに彼女があつという間に怒つたりいろいろして僕がとりなす役になる。

最初はそれが納得できなかつた。僕だつて彼女の態度とか不機嫌そ  
うな顔に腹が立つて、どうしようもなかつた。別れた方が精神衛生  
上いいのかもしない、と思つたこともあつた。ケーキごときでキ  
レられても男としてどうなのだろう、それをなだめなきゃならない  
のなんて女みたいな、優しさを売りにしないと女にモテないような、  
軟弱男の役目だと思つていたのに。

「お前が風呂入つたままだと、俺は今日誰抱いて寝ればいいんだよ  
ー」

シャワーの音はいつの間にかやんでいた。

面倒臭がりなんだけどな、と僕はなんだか可笑しくなつてくる。  
面倒臭がりなんだけどな、本当はこんな猫なで声を出してつまら  
ないことで不機嫌になつた恋人なんか放つておいて、ベッドでごろ  
ごろ寝るとかワインをひとりで飲んでしまうとかしてしまつ方が楽  
だと思うのだけれど。

「出てこいよ、フルーツタルト一口くれ、チョコレートパイ一口や  
るから」「

スコールみたいな僕の彼女、どうして彼女じゃなきゃ駄目なのか  
なんて理由は分からんし、僕はメルヘンみたいな女性が元々好き  
なのだ、それでも。

「出てこーい、いい加減にしないと俺だつて怒るぞ」

バスタオル、ドアの向こうからぐぐもつた、怒つたような声が  
する。

「なに、」

バスタオル、あたしなんにも持たないで入っちゃつた。

ガチャリ、ドアノブが回されて、鍵が解除される。待つてまし  
たとばかりに飛び込めば平手打ちではすまないことを知つてゐるの  
で、哀しいことに過去の経験からだ。僕はホテル備え付けの籠  
から取り出してきたバスタオルを、右手と供に少し開かれたドアか  
ら突つ込んでやる。引っ手繩られて、それはつい想像を忘れていた  
ことだつたので僕の身体はバランスを崩しかけた。

困った恋人。

きっと僕以外は彼女と付き合えない、なんなく、でも核心的に  
僕は思う。

僕以外は彼女のスコールに体力を奪われてへとへとなつてしま  
うだけだ。

怒った顔のままバスタオルを巻きつけてドアを勢いよく開け、出  
てきた彼女はそれでも多少悪いと思っているのかいないのか、僕の  
顔をちらりと見る。ケーキ食べようか、と言おうと思つていたのに、  
僕の口からこぼされたのは全然違う言葉で。

「結婚しようか」

「　　つ、え、」

あつという間に驚いた顔になつた彼女に釣られて自分もその表情  
にならないよう、驚くのは心の中だけにしておく。見開かれた目が  
きらきらと光を宿している。

「　　ば、」

かじやないの、と途切れ途切れに続けられた言葉の端から笑い声  
が照れた色をして覗く、彼女はどうしていいのか分からぬのだろう、嬉しいような怒つているような複雑な顔をした。

「馬鹿かな、そうかな、」

口にしたらそれはずつと言おうと決めていたことなのだと思える  
くらい、心から彼女と結婚したい気になつてきた。プロポーズにな  
るのだろう、ストレートすぎたかな、もうちょっとムードを作つて  
いつた方が良かつたかな、と正直思わないでもなかつたけど。

「結婚しようよ」

多分これからもケーキのことでケンカしたり意味の分からないと  
ころで機嫌を損ねる彼女に四苦八苦させられるのだろうけど、そう  
いうのも素敵に思えた。きっと、素敵なのだと、思う。

フルーツタルト一口ならあげてもいい、と照れくさそうに言つた  
彼女の、それが返事なのだと信じて僕は笑顔を向ける。抱き付いて  
キスしたかつたけど、それは後のお楽しみにとつておいて、風邪引

いちやうとこけないからさ、と彼女に着替えを促した。

(後書き)

人様の結婚記念に、勝手に書きました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5563m/>

---

スコール

2010年10月8日14時19分発行